

月面地図をつくる 月に始まり月に還る

今年は、アメリカ NASA の有人月探査機アポロ 11 号が月に初めて着陸して 50 周年ということで、様々なメディアで月にまつわる話題が溢れました。

思い出してみると、50 年前のあの当時、11 号の打ち上げや着陸の瞬間に立ち会いたくて、夜中や朝早くに起き出してテレビの中継に噛りついていたのが懐かしく感じられます。

もとより、天文ファンにとって月は最も手軽に観察できる身近な天体です。望遠鏡を手に入れて、まず最初に眺めるのが月で、月齢が進むにつれて変化する地形を毎日眺めていると、飽きることがありません。でも、漠然とクレーターや山脈を眺めるところから一歩踏みだそうとすると、それに伴う知識が必要になってきます。

旅行でいろいろな土地を訪ねるときに観光ガイドブックが便利のように、月の地形巡りを進めながら、月の名所を記憶し記録していくためには、その案内となる詳しい地図がほしくなってきます。

それではその要求に耐える月面図はどうかというと、外国のものはともかくも日本語の月面図は全天恒星図や天文年鑑などにおまけ程度に添付されているものがあるものの、詳細な地図としては「月面ウォッチング AtlasOfTheMoon」くらいしか見当たるものはありません。ただ、この月面図も、内容は良いのですが、地図の分割数が多すぎて(表面で 76 図)見通しが悪いのがつらいところで、なかなか目的に叶うものではありませんでした。

例えば、星図ならば、天体観察に必要な情報は恒星や星雲星団のナンバー程度なので外国語の図版でも実用に支障はありませんが、月面図は地名が直感的に読める必要があるため、やはり日本語で記述されている地図があると便利です。

そのような中、2011 年に NASA が LRO 衛星による 0.5 ギガバイトの月面図を公表し、本誌(2011 年 6 月版)でもその素晴らしさを紹介したことがありました。それで、この画像を使った月面地図があればいいなと漠然と思っていたところ、2013 年に Charles A. Wood 氏らの手により 21th Century AtlasOfTheMoon という、まさにその

コンセプトによる月面地図が出版されました。

その地図があまりに素晴らしいので、一念発起して、同じレイアウトに基づく日本語の月面地図をつくろうと当時からぼちぼちと作業を始めたものの、あまりの作業量の多さに半分心が折れて暫くの間放置してしまいました。しかし、いつまでも抱えているのはどうにも気になって心の健康によくないので、4 年ほどの中断を経て、この秋に一気に作業を進め、ようやく完成に漕ぎつけました。

内容的には、オリジナルの 21th…と Atlas…の掲載地名をほぼ網羅したうえで、いくつかの固有名称を追加し、総掲載地名数 1300 を超える月面図になっており、また、使い勝手が悪いと感じた部分は自分なりの改善を加えています。(各地図周囲の重複部分の追加、経緯線の追加等) 現時点では残念ながら月縁部分の地図が未完となっているのですが、並行して作業を進めつつも、(完成に辿り着くのはいつになるのかわからないので)とりあえず実用に問題は無いため索引も含めて一冊の本にまとめました。



さらに、最近に津村光則氏が「星空名所百」という冊子をフォトブックで制作され、とても素敵に仕上がっていたので、同じ会社(シマウマプリント)に注文して冊子にしてもらったところ、かなりいい感じの出来になりました。せっかくなので、もうすこし熟成させたいので、折を見て自身の HP 上に PDF をアップすることも考えたいと思っています。

今回の一連の作業で、月の地形を詳しく調べる
ことになり、改めて月の面白さにはまりました。もう
少し若い頃ならば、これだけの詰めた作業をすると、
ほとんど内容（地名）を覚えてしまっていたら
思うのですが、いかんせん歳を重ね脳細胞が減っ

ているので記憶能力に限界があるのが悲しいと
ころです。一方で、これまで何冊もの書籍等に分散
していた情報を自分なりにひとつにまとめること
ができたので、これを座右に月面観察がいっそう
楽しいものになると感じています。

月の地図の上下 古くて新しい東西南北問題

月の地図は北が上か？南が上か？ まるで「チ
コちゃんに叱られる」に出てきそうな質問ですが、
（地球の地図の上下については19年8月に既出）
実際のところははっきりとしていません。

みかけ上（北半球の場合）南中している月は北
が上になっていて、地球の一般的な地図との親和
性からも北が上というのがありがちですが、一方
で、ケプラー式望遠鏡で見た天体は像が180度逆
になる事情から（スケッチで描くと）比較対照す
るには南を上にするのが良いというのも自然の成
り行きに感じます。（木星の大赤斑は赤道より上、
火星の大シュルチスは逆三角形という印象がある
のと同じですね。）

今回、月面地図を作成するにあたって、さてど
ちらを上にしたものか、いよいよ真剣に調べる必
要に迫られて、あれこれと根拠らしいものを探し
たものの、「あくまで個人の感想です」的な記述し
か見当たらず、難破してしまいました。

結局、最後に、昭和42年に発売された「写真
で見る月面観測」（誠文堂新光社）のコラムの中
で「1961年、IAUの総会で勧告案が決議され、月
面図は南が上…」との記述を発見し、自分で納得
して今回の月面図は南を上にすることにしました。

尤も、IAUの勧告案そのものを参照しているわ
けでもなく、まして60年近くも前の勧告案なの
で、今はどう取り扱われているのやら、怪しいと
ころではあります。

困みに、書籍や雑誌によって上下をどちらにす
るのか方針がまちまちのようで、それぞれの主張
があるとはいえ、天体写真欄や月面のガイド等で
上下が不統一の図が入り乱れるという状況は迷
いが生じて困ります。そういえば、「本田・ムルコス
・パジュサコバ（パイドゥシャーコヴァー）彗星」
も根はおなじようかことだったと思い出します。

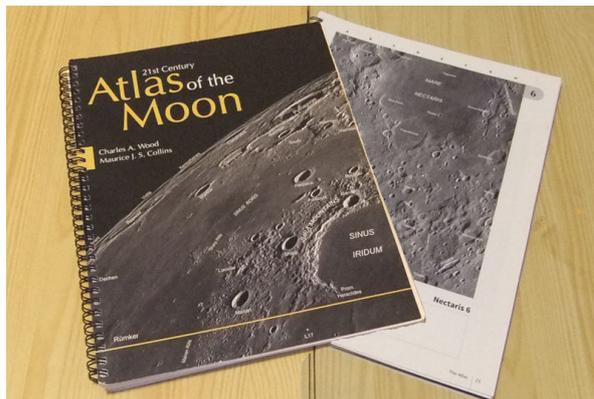
Books & CDs 21st Century Atlas of the Moon Charles A. Wood ほか

今回制作した月面地図のお手本にした月面地図
であります。

小口径望遠鏡による月面観察のガイドとして縮
尺も適切で、詳細さと見やすさを兼ね備えた決定
版的な月面地図となっています。

唯一の欠点が日本語で書かれていないというこ
とで、リスpektが高じてとうとう自分でほぼ同
じ内容の月面図をつくってしまいました。

それでも持っておいて損のない逸品であります。
参考までに、この月面図は北が上でした。



編集後記

随分と本誌を作るのをサボってしまいました。

本誌にして記録しておきたいネタはあるのに、年
度替わり以降に生活のリズムが変わってしまった
のと、何よりこの月面地図で他の作業が滞った結果
がこのあり様であります。前回宣言したキャッチア
ップはもう風前の灯です。

閑話休題。星図には、例えば「ノルトン星図」の
ように人名を冠されたものがたくさんあります。

今回の月面図も気の利いた名前にしようと考えて、
熟考の末奥さんの名前の表紙を試作して本人にお
諮りしたところ鰐膠も無く却下と相成りました。結
果、年号をタイトルにするありきたりなものにし
ましたが、それでも21thの洒落なんです。

Kz_Wada 和田一人 Kazuto.wada@nifty.com